

追手門学院大学 研究シーズ 目次

■健康・福祉・スポーツ

外国にルーツを持つ女性の声から考える、 多様化する妊娠・出産・産後ケア（ウィリアムズ・エリザベス・アン）	1
思い込みは現実になる？（金政 祐司）	2
病の体験や子どもの発達・成長について、心理臨床的視座から考える（駿地 眞由美）	3
身体心理学と方法論の研究（福市 彩乃）	4
「1億総スポーツ社会」の実現に向け、スポーツを科学する（辰本 頼弘）	5
社会福祉でより良い地域社会づくり（古川 隆司）	6
高齢者の健康、体力を支える。（松井 健）	7
患者／医療従事者／地域住民／企業の協働による保健・医療・福祉の構築（松繁 卓哉）	8
競技力向上と健康増進のための運動の研究（植松 梓）	9
システムの組み合わせ（しくみ）で課題解決を目指す（林 勇樹）	10
地域コミュニティ、ロングトレイルの研究（石盛 真徳）	11
行動計量学の研究と社会貢献（原田 章）	12
対話と協働で進める地域・観光・防災のユニバーサルデザイン研究（石塚 裕子）	13

※所属学部、職位、氏名五十音順に掲載

外国にルーツを持つ女性の声から考える、 多様化する妊娠・出産・産後ケア

研究内容

●多様な背景を持つ女性のためのケアの研究

- 本研究は、日本で暮らす外国にルーツを持つ女性たちの妊娠・出産・産後の経験に焦点を当てている。アンケート調査や質的インタビューのデータを分析し、さまざまな女性たちの声や経験から、より適切で思いやりのある妊娠・出産・産後ケアのあり方を探る。
- 具体的に、日本のマタニティケアは安全性が高く、多くの女性から評価されている一方で、改善が求められる課題も明らかになった。特に、ケアチーム（医療従事者）の異文化理解やコミュニケーションに関する知識・技能の不足、そして女性一人ひとりのニーズや自律性への配慮が十分ではない場合があることが示された。



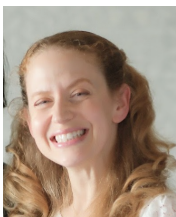
新規性・優位性

- ▶これまでの研究ではケアチームの視点に焦点が当てられることが多かったが、本研究は外国にルーツを持つ女性自身の声を中心に、妊娠・出産・産後の経験を明らかにしている点に新規性がある。その結果、文化的背景への配慮や女性の自律性の尊重、精神的ケアの重要性が示された。また、医療的支援だけでなく、外国人コミュニティや地域の支援者によるサポートの重要性にも着目している。

応用・活用例

<当事者・研究者・支援者をつなぐ活動>

- 助産師と連携した外国人母親向け相談会
- 在留外国人女性の健康に関する研究発表・パネルディスカッション
- 地域で活動する支援者や外国人コミュニティとの協働活動



**ウィリアムズ・
エリザベス・アン**
准教授

国際学部

所属学会：Women's Action Network (WAM)
異文化コミュニケーション学会 (SIETAR)
全国語学教育学会 (JALT)

委員等：TABUNKO Ibaraki (多文化子育て団体) 代表
Bilingualism SIG (JALT)

思い込みは現実になる？

心理学で人間関係の思い込みを解く研究

研究内容

●思い込みの現実化の研究

- ・頭の中にある思い込みが、親密な関係（恋愛関係、夫婦関係など）の形成や進展、社会と関わることへの動機づけや将来への展望、個人の適応状態に対してどのような影響を及ぼしているのかについて、言い換えれば、思い込みがどのように現実化するかについて研究している。

●犯罪の未然防止・深刻化防止の研究

- ・親密な関係内の暴力（DV、DaV）や親密な関係が破綻した後のストーキングの問題に関し、公的機関とも連携を取りながら、DVやDaV、ストーキングの未然防止や早期発見、また、深刻化防止のための介入を見据えた研究を行っている。



新規性・優位性

- ▶親密な関係（夫婦関係や恋愛関係など）の研究では国内第一人者の存在であり、NHKテレビ（Eテレ）やKTV関西テレビ放送等で研究が紹介されている。
- ▶親密な関係における暴力（IPV）やストーカーへの対策について、個人特性や関係特性、社会経済的要因等がIPV加害やストーキング加害に及ぼす影響について、警察等と連携を取りながら、分析している。

応用・活用例

<心理と判断・行動の関連に関する研究>

- ネガティブな思考の抑制に関する研究
- 自分自身や相手の感情のみえる化への応用－「犯罪の未然防止」や「より良い親密な関係の形成・維持」の実現



金政 祐司

教授

心理学部 心理学科

心理学研究科

所属学会：日本発達心理学会、日本社会心理学会、日本心理学会

日本グループ・ダイナミクス学会

日本パーソナリティ心理学会

日本感情心理学会

Asian Association of Social Psychology

委員等：発達心理学研究編集委員長
社会心理学会地方理事

産学官連携オフィス

✉ sangakukan@otemon.ac.jp

病の体験や子どもの発達・成長について、 心理臨床的視座から考える

研究内容

● 身体疾患を抱えた人や困難を抱えた子ども・家族への心理臨床的援助の研究

- ・精神科領域の疾患だけでなく、遺伝性疾患、HIV、がん等、身体疾患を抱えた方々への心理臨床的援助の可能性とそのあり方について実践的・実証的な研究を行っている。また、発達上の課題や生きる困難を抱えた子ども・家族への心理臨床的援助およびその研究を行っている。

- ・研究実績として、『身体の病と心理臨床』『心理療法と医学の接点』『遊戯療法と子どもの今』（いずれも共著、創元社）、『臨床心理学』（共著、金剛出版）、『遊戯療法』（共著、ミネルヴァ書房）、『朝倉心理学講座9臨床心理学』（共著、朝倉書店）等がある。

臨床心理学

JAPANESE JOURNAL OF CLINICAL PSYCHOLOGY

Vol.5 No.2

2005.2

特集 体の病気の心理的援助

目次

体の病気の心理的援助の重要性…………… 1

がん患者の心理的援助…………… 2

高血圧治療薬の副作用と心理的援助…………… 3

糖尿病と心理的援助…………… 4

心臓病と心理的援助…………… 5

呼吸器疾患と心理的援助…………… 6

腎臓病と心理的援助…………… 7

肝臓病と心理的援助…………… 8

胆石と心理的援助…………… 9

胆管癌と心理的援助…………… 10

膵臓癌と心理的援助…………… 11

胃癌と心理的援助…………… 12

大腸癌と心理的援助…………… 13

肺癌と心理的援助…………… 14

乳がんと心理的援助…………… 15

子宮頸がんの心理的援助…………… 16

卵巣がんの心理的援助…………… 17

子宮体がんの心理的援助…………… 18

子宮がんの心理的援助…………… 19

子宮がんの心理的援助…………… 20

子宮がんの心理的援助…………… 21

子宮がんの心理的援助…………… 22

子宮がんの心理的援助…………… 23

子宮がんの心理的援助…………… 24

子宮がんの心理的援助…………… 25

子宮がんの心理的援助…………… 26

子宮がんの心理的援助…………… 27

子宮がんの心理的援助…………… 28

子宮がんの心理的援助…………… 29

子宮がんの心理的援助…………… 30

子宮がんの心理的援助…………… 31

子宮がんの心理的援助…………… 32

子宮がんの心理的援助…………… 33

子宮がんの心理的援助…………… 34

子宮がんの心理的援助…………… 35

子宮がんの心理的援助…………… 36

子宮がんの心理的援助…………… 37

子宮がんの心理的援助…………… 38

子宮がんの心理的援助…………… 39

新規性・優位性

- ▶ 公認心理師および臨床心理士として、身体疾患を持った方々や、生きる困難を抱えた子どもや家族への心理臨床的援助を行うなど、幅広い領域での活動を行っている。

応用・活用例

<臨床領域における研究および支援活動>

- 病を持ちつつ豊かに生きるための研究
- 子どもの発達や子育て支援に関わる研究



駿地 真由美

教授

心理学部 心理学科
心理学研究科

所属学会：日本心理臨床学会、日本箱庭療学会、
日本ユング心理学会、日本健康心理学会

委員等：神戸市立中央市民病院・医の倫理委員会 外部委員



産学官連携オフィス

✉ sangakukan@otemon.ac.jp

身体心理学と方法論の研究

研究内容

● 日本文化的な身体姿勢・動作が心理的側面に及ぼす効果の研究

- ・正座やラジオ体操など、日本特有の身体姿勢・動作が心理的側面に及ぼす効果を研究してきた。正座が授業中の眠気を緩和する効果をもつことの実証、マインドフルネス・ヨガとゆっくりおこなうラジオ体操（マインドフル・ラジオ体操）の比較研究などを実施してきた。

● 視覚障害に関する方法論の研究

- ・視覚障害者のアクセシビリティに配慮した心理測定法や、ロービジョン（視力はあるが視覚に異常がある）の見え方の再現方法を研究してきた。本来は視覚の手がかりを使う測定法を触覚の手がかりで再現した研究や、ロービジョンの見え方の言語的表現に関する調査を実施してきた。



新規性・優位性

- ▶正座やラジオ体操などの日本文化的な身体姿勢・動作が心理的側面に及ぼす効果の研究は新規的で、日本ならではの発想のため、海外の心理学にとっても新しい知見と考えられる。
- ▶既存の心理尺度を視覚障害者向けに再設計するという試みは他に類を見ない。また、ロービジョンの見え方の表現の研究は、周囲の人のロービジョン理解につながると考えられる。

応用・活用例

<教育・臨床場面への導入構想>

- ラジオ体操など学校生活になじむ身体活動のメンタルヘルスケアへの応用
- 視覚障害者でも回答可能な、臨床場面で用いられる心理尺度の実現
- ロービジョン者の見え方を周囲の人が追体験できるツールの開発



福市 彩乃

特任助教

心理学部 心理学科

所属学会：日本心理学会
日本認知科学会
日本応用心理学会

委員等：日本マインドフルネス学会 幹事
日本マインドフルネス学会第6回大会 大会準備委員
日本イメージ心理学会第26回大会 大会準備委員
日本マインドフルネス学会第6回大会 最優秀研究賞



産学官連携オフィス

✉ sangakukan@otemon.ac.jp

「1億総スポーツ社会」の実現に向け、 スポーツを科学する

研究内容

●スポーツ人材育成

- ・国のスポーツ基本計画に基づき、スポーツ人材育成事業を推進するため、産業界、自治体、スポーツ団体等との連携体制を構築し、地域や産学と一体となった教育研究活動を展開している。
- ・我が国と地域の発展に寄与するため、地域スポーツ人材育成コンソーシアムを設立して産学官18団体と人材育成の研究・教育を行っている。

●「笑い」と「身体能力」との関係の研究

- ・大学の女子サッカー部を対象に、明るさやチームへの声かけに着目した「笑い」と、体力や技術を総合的に判断した「身体能力」の2項目で統計分析し、「笑い」と「身体能力」の相関関係を研究している。



新規性・優位性

- ▶地域スポーツ人材育成コンソーシアムにおいて、多様な企業・団体、教育機関及び官公庁等からニーズ（企業・団体等が求める人材の資質・能力、必要な知識・スキル）を直接聴取することができる。
- ▶「笑い」と「身体能力」の関係の研究はビジネスや日常生活に応用できる。

応用・活用例

<スポーツが健康に及ぼす身体的・心理的な研究>

- イオンモールウォーキング+熱中症対策講座
- 高齢者運動プログラム指導
- 健康づくり、介護予防に向けた事業展開



辰本 頼弘

教授

社会学部 社会学科

所属学会：日本教育医学会
日本体育・スポーツ・健康学会

委員等：茨木市スポーツ審議会 会長

社会福祉でより良い地域社会づくり

研究内容

●「こども食堂」の運営による地域社会貢献

- ・茨木市社会福祉協議会が推進する空き家を活用したコミュニティ施設の整備事業にゼミ生とともに参画。地域住民と協力して、耳原（みのほら）地区の建物を地域の交流施設「子民家よってこ」にリフォームすることを支援するとともに、茨木市社会福祉協議会が「子民家よってこ」で事業開始した「こども食堂」の運営にも参画し、ゼミのフィールドワークとして現在も継続している。大学生が「こども食堂」事業の運営に携わることは茨木市では初の試みとなり、サンデー毎日2017年10月8日号の「大学プレスセンターニュースダイジェスト」欄に取り上げられている。



新規性・優位性

- ▶厚生労働科学研究「罪を犯した高齢・障害者の支援の研究」（2009年～2011年）に参画し、罪を犯した高齢者・障害者の社会復帰など調査研究にもとづいて、社会的排除に陥る人びとの社会復帰・こども食堂など地域社会の居場所作り・地域の防災活動など社会福祉の幅広いテーマに取り組んでいる。

応用・活用例

<社会福祉の研究、地域社会貢献活動動>

- 自治会の無い団地の活性化（多角的な団地の支援）
- 自治体や地域の学校に対する防災教育の支援



古川 隆司

教授

社会学部 社会学科

所属学会：日本老年社会学会、日本社会福祉学会、
日本犯罪社会学会、日本社会学会、日本司法福祉学会ほか

委員等：茨木市コミュニティソーシャルワーカー協議会 スーパーバイザー
NPO法人スキマサポートセンター 監事
茨木市社会福祉協議会ボランティアセンター運営検討委員会
委員長ほか

高齢者の健康、体力を支える。

高齢者の長期トレーニング支援、スポーツマネジメントによる生涯スポーツや地域コミュニティの活性化

研究内容

●高齢者の体力の経年変化の研究

- ・高齢者の長期トレーニング（陸上運動、水中運動）によって得られた体力測定データ（歩行時間、歩行バランス、日常生活と歩数との関係、血管の硬さ、運動強度などのデータ）を活用し、高齢者の介護予防や健康度の維持・増進を支援することを研究している。

●スポーツマネジメントに関する実践研究

- ・スポーツによる地域連携の実践研究の一環として、上記トレーニングを行う「はつらつ運動サークル」ならびにパラリンピックの正式種目である「ボッチャ」による「追手門学院大学ボッチャ健康サークル」の開催を通じて地域コミュニティの活性化や生涯スポーツを研究している。



新規性・優位性

- ▶本研究は、生理学的な研究成果が得られるだけでなく、社会的な観点から高齢者に居場所（交流できる機会）を提供できることにより、生きがいづくりや毎日の生活における潤いやハリにつなげることに寄与している。
- ▶高齢者自身の体力や健康度の確認を定期的に行うことができる。

応用・活用例

<加齢と健康および身体活動能力との相関に関する研究>

- 高齢者のバランス能力（転倒予防）を鍛える方策検討への応用
- 体力と血管の硬さなどの経年変化から健康度を予測することへの応用



松井 健

教授

社会学部 社会学科

所属学会：日本体力医学会

日本体育・スポーツ・健康学会

日本運動生理学会、日本水泳・水中運動学会

委員等：元 日本水泳連盟 理事

元 愛知水泳連盟 理事

茨木市生活支援体制整備推進協議体 会長

患者／医療従事者／地域住民／企業の協働による保健・医療・福祉の構築

研究内容

●対人支援現場における「熟議」の研究

- 日々アップデートされる医療情報、ひっ迫する医療現場、メディアを横行する誤報・デマなどから、ますます難しくなっている健康・病・医療に関する情報のやり取り／コミュニケーションを良好なものとするために、「熟議（deliberation）」「対話（dialogue）」の手法を応用し、患者と医療従事者の双方が、より深く相互理解できるコミュニケーションの方法を開発する研究（アクションリサーチ）を展開している。

●難病ピアサポートの研究

- 治療法が確立されておらず、患者数も少ない「希少疾患」を持つ患者同士が、経験・悩み・情報等を共有し、相互のエンパワメントを可能にする「難病ピアサポート」に関する研究と、これを担う「難病ピアサポーター」の育成に従事している。



新規性・優位性

- ▶知識・技術・専門性を有する医療従事者が優位に立ちがちな従来のコミュニケーションモデルを脱却し、医療の受け手（患者・家族）が納得し積極的に参画できる医療を実現するものとして、本研究は患者グループ・医療機関・教育機関・民間企業等から注目を集めている。
- ▶不足する医療・介護の専門職従事者に代わり、地域住民・当事者・高齢者らが、サポートを受けながら保健・医療・福祉・教育などの「対人支援の新たな担い手」として活躍の機会を得る。このことが「持続可能なケアシステム」を下支えする。

応用・活用例

<住民・患者・高齢者他、医療従事者ではない人的資源の参画促進>

- 自治体が設置する難病相談支援センターや難病患者連絡協議会等が開催するピアサポーター養成研修において人材育成に従事
- 医療従事者・当事者・行政機関・企業等を対象とする「ピアサポート」に関する教材作成及び著述講演活動に従事

松繁 卓哉

教授

社会学部 社会学科
現代社会文化研究科

所属学会：日本保健医療社会学会
日本社会学会
福祉社会学会

委員等：日本保健医療社会学会 理事

競技力向上と健康増進のための運動の研究

研究内容

●GPS装置を用いた運動特性評価の研究

- GPSを用いて選手の競技中の身体的負荷を定量化し、その特徴を把握・評価している。これまでに、2022年度関西女子学生サッカーリーグ1部の女子チームと2022年度関西学生サッカーリーグ3部の男子チームのサッカー選手を対象としてGPSを用いて試合中の移動データを計測し、男子サッカー選手のパフォーマンスを基準にして大学女子サッカー選手のスプリント速度閾値を検討した。



●加圧トレーニングによる心臓疾患患者のリハビリテーションの研究

- 加圧トレーニングを応用した有酸素運動が心臓リハビリテーションに安全にを応用できるか、生理学的負荷と主観的負荷の側面から科学的エビデンスを集めている。

新規性・優位性

- ▶競技力向上や健康増進のための運動について、動作の特徴と神経筋制御の観点から研究を行っている。

応用・活用例

<競技力向上と健康増進のための運動の研究>

- 水泳を通じての地域貢献、新興スポーツへの貢献
- 子供の運動機能向上、怪我防止、高齢者の身体バランス向上など地域や企業（特にスポーツメーカー）のニーズに対する研究



植松 梓

准教授

社会学部 社会学科

所属学会：日本水泳・水中運動学会、日本体力医学会

委員等：日本水泳・水中運動学会運営委員会 企画連携委員会 委員長
日本水泳連盟 科学委員会 科学委員

システムの組み合わせ(しくみ)で課題解決を目指す

研究内容

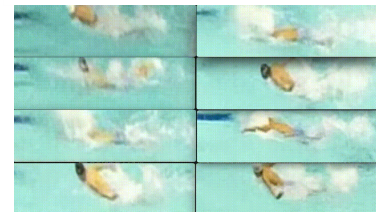
●競技の映像と分析データを迅速にフィードバックするシステムの研究

- ・日本水泳連盟の科学委員として、選手の泳ぎを分析・みえる化し、選手やコーチに迅速にフィードバックするため、競技の映像データと分析データを迅速に同時提供する全く新しいフィードバックシステム（時空間非依存型フィードバックシステム）を開発し、LINEを介して競技終了後速やかに選手のスマートフォンから映像データと分析データを見ることができるようにした。



●競技映像を自動分析するシステムの研究

- ・プールの中央または両端に設置したビデオカメラ映像から、レース全体に渡って選手の頭部位置を機械学習を用いて解析するAIシステムを研究している。
(2023福岡・世界選手権から運用予定)



新規性・優位性

- ▶本研究は、世の中の様々なしくみ（システム）やツール（これらの組合せも含む）を利用し、世の中の問題や課題に対する改善策を提案して「かゆいところに手が届くしくみ」を社会実装する点に強みを持つため、費用対効果や、開発から運用までの高速化などが期待できる。
- ▶世の中の様々なシステム（モノ・サービス・ルールなど）を構成する仕組みを活かした研究であるため、応用の汎用性が非常に高い。

応用・活用例

<対象を分析・データ化・可視化し、わかりやすくフィードバックする研究>

- スポーツ競技の種類を問わず、適切なツールや機器を用いてアレンジする
- フィードバック技術を高齢者や障がい者用リハビリトレーニングへ応用する



林 勇樹

准教授

社会学部 社会学科

社会活動：競泳日本代表チームの科学サポート

委員等：公益財団法人日本水泳連盟 競泳委員会委員
公益財団法人日本水泳連盟 科学委員会委員

地域コミュニティ、ロングトレイルの研究

研究内容

●地域コミュニティの研究

- ・人々の地域コミュニティに対する意識が実際の地域活動への参加とどのように関連しているのかについて社会心理学の視点から、質的アプローチ・量的アプローチの両方を用いて研究している。研究実績として、「写真・ナラティブ誘出法を用いた中高年の地域コミュニティへの意識と地域における活動を把握する研究」、「行政と住民の協働を進めるための要因の研究」、「科警研との共同による地域防犯の意識高揚に関する研究」などがある。

●日本のロングトレイルを歩く旅についての体験研究

- ・「道を歩くこと」の意味と観光旅行における資源としての「道」の活用を提案する研究であり、中山道、塩の道、熊野古道小辺路・中辺路の4つのロングトレイルを歩いた経験を考察対象としている。



新規性・優位性

- ▶社会心理学およびコミュニティ心理学の専門分野の研究だけでなく、観光学の分野における研究も行っており、日本のロングトレイルを歩く体験研究においては、観光的な視点だけではなく、社会心理学的および歴史学的なアプローチを行っている。

応用・活用例

<地域コミュニティの研究>

- タワーマンション等の大規模集合住宅を含む地域コミュニティの醸成
- トレイルランニングのこれからの発展のさせ方



石盛 真徳

教授

経営学部 経営学科
経営・経済研究科

所属学会：日本ニュージーランド学会、日本生涯スポーツ学会
日本家族心理学会、日本スポーツマネジメント学会
日本質的心理学会、日本コミュニティ心理学会ほか

委員等：日本グループ・ダイナミックス学会 編集委員
日本コミュニティ心理学会 常任理事

行動計量学の研究と社会貢献

研究内容

●データ解析方法や心理測定法の研究、警察との連携による社会貢献

- ・アンケート調査や実験を行ったときに得られるデータの解析方法や、通常の方法では測定しにくい心理事象の測定に関する研究、警視庁や大阪府府警と連携しての社会貢献活動を行っている。
- ・具体的な研究および活動実績として、「精神疾患を有する高齢者が入居する高齢者施設の花壇の心理的効果の研究」、「大阪府警察本部府民安全対策課と犯罪被害を疑似体験できるVR（仮想現実）コンテンツの共同開発を行い、歩きスマホで公園を歩いているところ、背後から不審な人物が迫ってくる場面を疑似体験できるようにした研究」、「警視庁防犯実務専科・犯罪情勢分析コースにおける行動計量学入門の10年間にわたる講演」などがある。



新規性・優位性

- ▶幅広い分析手法の知識と経験に基づき、人が無理と思うデータ処理や特殊なデータ処理であってもデータ処理や分析方法を見つけ出すことができる。

応用・活用例

<データ解析方法・心理測定法の研究、社会貢献>

- 大阪府警察本部府民安全対策課と犯罪被害を疑似体験できる新たなVR（仮想現実）コンテンツの共同開発

原田 章

教授

経営学部 経営学科
経営・経済研究科

所属学会：日本行動計量学会、日本心理学会、日本教育心理学会
日本犯罪心理学会、日本認知科学会、大学教育学会

委員等：大阪府安全なまちづくり推進会議 学識経験者
私立大学情報教育協会教育イノベーション大会運営委員 委員
大阪府警防犯対策高度化協働研究会 座長ほか

対話と協働で進める地域・観光・防災のユニバーサルデザイン研究

研究内容

●多様な当事者参画によるユニバーサルデザインの実践研究

- ・公共空間、観光地、大規模イベント等を対象に、障害のある人をはじめとする多様な人々が参画するユニバーサルデザインの実践研究を行っている。2025年に開催された大阪・関西万博の大阪ヘルスケアパビリオンでは、当事者参画のワークショップを企画・助言し、その共創プロセスの研究を行った。特に、これまで参加の場からこぼれ落ちやすかった「小さな声」を受けとめ、計画・設計・運営の改善につなげる場づくりに着目している。

●災害と障害をテーマとした防災のまちづくり研究

- ・災害時に高齢者や障害者などに被害が集中してきた背景を踏まえ、災害時の“障害”を社会の側にある課題として捉え直す研究を行っている。熊本地震、西日本豪雨災害、倉敷市真備町での調査やアクションリサーチを通じて、当事者参画による防災・復興まちづくりのあり方をテーマにしている。



避難所ワークショップの様子

新規性・優位性

- ▶「小さな声」を地域づくりの担い手として捉える点に特徴がある。
障害のある人や高齢者等を支援される対象としてだけでなく、共に考える主体として位置づける。意見聴取にとどまらない、共創型の当事者参画プロセスを提案できる。
- ▶観光・イベント・災害など非日常の場面を対象とする。
日常生活に加え、観光、イベント、避難、復興といった場面で生じる見えにくい困りごとを把握し、安心して参加・滞在・避難できる環境づくりにつなげる。

応用・活用例

<自治体・企業と連携したインクルーシブデザインの推進>

- 公共空間、観光地、交通結節点等を対象としたユニバーサルデザイン評価・改善提案
- 障害のある人をはじめとする多様な当事者が参画するワークショップの企画・運営支援
- 地区防災計画、復興まちづくり等における当事者参画プロセスの構築



石塚 裕子

教授

地域創造学部
地域創造学科

所属学会：土木学会、日本福祉のまちづくり学会
日本観光研究学会、障害学会、日本都市計画学会ほか

委員等：日本福祉のまちづくり学会 副会長
土木学会土木計画学 DEAIまちづくり小委員会 副委員長
各種審議会・委員会委員（国土交通省総合政策局、国土交通省近畿運輸局、大阪府、大阪市、吹田市、堺市等）

受賞：日本福祉のまちづくり学会 第14回（2023年度）学術賞
地区防災計画学会 2021年度 学会賞（奨励賞）